

南河内第二中学校区

【目指す子ども像】

(まなび) 主体的に考え、学び合いを通して互いに高め合える子ども
 (こころ) 思いやりの心を持ち、自他を大切にできる子ども
 (からだ) 心身の健康に関心を持ち、たくましく実践できる子ども
 (ちいき) 社会に貢献し、地域に主体的に参画しようとする子ども

【実践研究課題】

(理数教育)

理数教育の充実と推進を通して、思考力や表現力の向上を図り、自ら課題を持ち、共に学び合い、深い学びに向かう子どもを育成します。重点教科(算数・数学、理科)

各部会の取組

<授業研究チーム 算数・数学部会>

【児童生徒の実態】

本地区の児童・生徒は、基礎的・基本的な知識が身に付いており、課題に対して自分の考えをもつことができる。しかし、自分の考えを根拠に基づいて説明することが苦手である。また、各種調査によると上位層と下位層の差が大きく、下位層の児童・生徒の底上げが課題である。

【部会のねらい】

自分の考えを相手に伝わるように分かりやすく、根拠に基づいて説明する「伝え合う活動」「学び合う活動」の一層の充実に努める。活動を通して下位層の児童・生徒のつまずきの解消を目指す。

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
----	----------------------	------------------------	-----------------------	-------------------------

取組	①中学校教員による、小学校への乗り入れ授業の実施(緑小・祇園小)を通して、学びをつなぐ。 ②3校での授業見学を実施し、児童・生徒の実態の把握、教師の発問の工夫や授業展開をもとに学び合う。 ③「伝え合う活動」「学び合う活動」の実践事例の報告会を通して、教師の指導力の向上に努める。
成果	①異校種間、教科の枠を越えた協議や授業見学を通して、互いの指導を振り返り、指導方法を学び合うことができた。ねらいの達成に向けた効果的な学習活動の在り方について考えることができた。 ②算数・数学的な活動の中で、特に発表についての指導の仕方について協議、実施、振り返りをする中で教師の指導力の向上に努めることができた。算数、数学科で意欲向上につながった。
課題	①今回研究した具体的な内容を算数・数学部会以外の先生方への周知、共有の仕方。 ②伝え合う、学び合う活動が、どのようにねらいの達成につながっているのか、吟味を行うこと(学習活動の有効性、ねらいの達成にせまる別の手立てはないか)。

<授業研究チーム 理科部会>

【児童生徒の実態】

知的な好奇心が高く、理科の授業にとっても意欲的に取り組む。また、学習塾に通う児童生徒の割合も高いため、知識が豊富である。しかし、知識が先行し、実験・観察における器具の操作などの習得を軽く考えている傾向があり、基本的な技能が身に付いていない児童・生徒も多い。また、実験の結果や原理などの知識がわかればよいという考えの児童生徒も多いので、自然事象について深く考えたり、生活体験や既習事項を結びつけて考えたりするなどの根拠を示して考えを書くことが苦しい傾向がある。

【部会のねらい】

「実験・観察の技能習得」や、予想・考察の過程における「思考力・表現力を高める」指導に視点を置いて授業を参観し合うことで、系統的な学習を進め、理数教育の充実を図る。

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
----	----------------------	------------------------	-----------------------	-------------------------

取組	①実験・観察の基本的な技能の指導の充実 ②予想・考察の過程における「思考力・表現力を高める」指導の充実(根拠を示しての予想や、型を示しての考察を書かせるなどの工夫を行い、書いたことをもとに話し合う場を設け、互いの考えを交流し深める活動を行う) ③ビデオリフレクションの活用(①、②の視点で授業の進め方を研究し、小中学校における互いの実態を把握する)
成果	①実験技能の習得について重点的に指導ができた。特に、S&Uや校内で実技研修を行ったり、長期休みに顕微鏡の整備を行ったりと、実技指導への教職員の意識が高くなった。 ②予想をしっかり書かせることで、深い考察へとつなげることができた。考察の書き方の型を継続して指導してきたことで、定着が見られ、子どもたちの表現力が向上している。 ③ビデオリフレクションでは、S&Uの授業を振り返りながら、指導のポイントや小中で一貫したい指導について話し合う機会を持つことができ、実態把握の貴重な場になった。特に授業者は客観的に自身の授業を振り返ることができ、充実した研修に結び付いた。
課題	化学系の実験(薬品や、火を使う実験)は立って行うなど、基本的な指導の徹底が課題である。きちんと安全眼鏡を着けさせるなど、安全面を第一に考え、適切な道具の使用法や実験の心得を指導することが重要である。特に、二中学区ではガラス器具の破損が多いので、ガラス器具の取り扱いについては小中で一貫した丁寧な指導を行っていく。本年度研究した内容については、次年度に引き継ぎ、継続的な指導を行っていく。そして、新学習指導要領の「科学的な見方・考え方」について小中での指導観を共有し、系統的な指導の研究を進めたい。

<学級づくりチーム>

【児童生徒の実態】

知的好奇心が高く、学習意欲が高い。学力も安定している。興味のあることに主体的に取り組むが、グループや学級といった集団で協同的に課題解決に向かう意識・解決する能力がやや低い。

【部会のねらい】

「学級力づくり」の初年度として、以下のことを進める。

- ①「学級力向上」の研修 ②各学校・学級における「学級力向上」の実践と分析・手だての検討

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
取組	①全学級で学級力アンケートを実施し、レーダーチャートを基に学級で話し合う。その内容を共有し、傾向を把握する。学級への支援の手立てを考える。 ②「学級力向上プログラム」についての研修。 ③全学級で、1回目の結果と最終回の結果を比較し、変化を見る。			
成果	【教師】 ○二中学校区の全通常学級で学級力アンケートを実施し、その分析方法を学級担任が共通理解できた。 ○学級の児童生徒が自身のクラスをどう感じているのか、現在あるいは変化について担任が把握し、その後の学級経営に生かす手立てとすることができた。 ○「学級力アンケート」の詳細について、本地区の児童生徒により適切な質問内容を検討し、今後に生かす計画が立てられた。 【児童・生徒】 ○児童生徒が自分たちの学級について分析することにより、クラスの問題を自分事として捉え、主体的に改善しようとする意識や、協同的に取り組もうとする学級力の高まりを喚起することができた。 ○「家庭学習強調週間」を、中学校の定期テストに合わせて3校一斉に行うことが定着し、学びに向かう姿勢づくりの一助となった。保護者への働きかけにもなった。			
課題	○「学級力向上プロジェクト」に則って「スマイルアクション」設定をすることや、効果の実感性を確認することが難しい。 ○「学級力アンケート」実施の適切な回数。 ○「家庭学習がんばりカード」の効果的な活用方法(学習内容・計画性・継続性等)。			

<道徳教育チーム>

【児童生徒の実態】

本学区の児童生徒の保護者には他県出身者が多く、将来的には県外への移動の可能性が高い家庭も多い。そのため、地域の伝統や文化への関心が高くない傾向が見られる。児童生徒も学校での活動以外に、地域の伝統や文化に触れる機会は少なく、郷土への関心や愛着はあまり高くないという実態が見られる。

【部会のねらい】

郷土への理解を深め、ふるさとを愛する心を育てる教育活動推進のための取り組みを考え、実践していく。

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
取組	①道徳に関する意識調査による重点価値項目の決定<C> ②重点価値項目を意識した授業実践<C> ③各校ごとの保護者・地域への啓発のための取り組み<D>			
成果	・道徳に関する意識調査を実施した。その結果から、二中学校区における重点内容項目「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」を設定することができた。さらに、重点内容項目についての調査も行い、「地域に対して関心はあるが、よりよくしようという気持ちが弱い」という本地区児童生徒の実態を把握することができた。それらを受け、道徳の授業実践や二中学校区クリーン活動などの際の児童生徒への意識付けなどで、重点内容項目を踏まえた指導を行うこともできた。			
課題	・重点内容項目に関する授業実践をさらに積み重ねていくことが大切である。その際、授業に活用できる地域教材や人材の開発・収集を行っていくことも必要である。 ・本地区の実態や授業実践の様子などを保護者や地域に発信し、啓発を進める手立ても考えていきたい。			

<心身健康チーム>

【児童生徒の実態】

- ・体育の授業では、できないことに挑戦しようとする意欲が低い児童生徒がみられる。
- ・立腰指導の効果は現れてきたが、「良い姿勢」を継続できる児童生徒はまだ少ない。
- ・朝食を毎日食べる児童生徒は86%と、比較的食べてきている。しかし朝食の内容に関して課題のある児童生徒がみられる。また、食べてこない理由には、生活リズムのみだれによる児童生徒が多い。
- ・保護者の健康や食への関心は全体的に高い。

【部会のねらい】

- ・体育に関する苦手意識(特にマット運動)の克服や、立腰指導の継続について、小中の発達段階に応じた指導を行う。
- ・体力向上のための基本的な生活習慣である朝食について、毎日朝食を食べることや、朝食の内容を充実しようとする意識を高めていく。

視点	<A> 教育課程の 工夫改善	 教育活動の 連続性の確保	<C> 教職員間の 連続・協働	<D> 家庭・地域との 連携・協力
----	----------------------	------------------------	-----------------------	-------------------------

取組	①各小中学校の体育の授業見学(10月上旬に実施) ②朝ごはん毎日食べよう週間の実施、朝食アンケートで実態把握、朝食欠食児童生徒への個別指導 ③立腰指導の継続、各校の学校保健給食委員会への参加
成果	各校の「マット運動」の授業を参観しあい、現状を把握し継続してできることについて確認できた。給食指導では、担任との情報交換により、配膳の仕方等について共通理解を図ることができた。また、「朝ごはん週間」の実施や保護者にチャレンジカードの振り返りを記入してもらったことで、親子で朝食について話し合うきっかけ作りができた。立腰指導や各校の学校保健給食委員会への参加、「二中学校区健康だより」の発行も継続することができた。
課題	今年度から、体育・保健体育科も加わりメンバーが充実したが、課題解決に向けての焦点化が不十分だった。児童生徒の健康課題解決に向けて、各々の専門分野が関係しながら取り組むことで、さらに効果が期待できる。



化学系実験の基礎指導



研究授業(数学)



学級カアンケート



レーダーチャートを基に各チームごとの協議



立腰タイム



全体会で各チームの活動内容を共有